

【 9 】

氏名	辻村公一 つじむらこういち
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第91号
学位授与の日付	昭和49年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	ハイデッガー論攷

(主査)
論文調査委員 教授 野田又夫 教授 武内義範 教授 武藤一雄

論文内容の要旨

本論文集は四篇の論文と三篇の附録とより成り、ハイデッガーの哲学の生成と変化とを詳しく追跡し、それを禅の思想とをあわせ考えたものであり、著者はハイデッガーから多くを学びつつ究極においては禅の立場をハイデッガーの立場よりも徹底したものとみとめるのである。

第四論文「ハイデッガーにおける歴史の問題」および附録「ブルトマンとハイデッガー」の示すように、ハイデッガーははじめ新カント学派およびディルタイの生哲学の考えをうけ、かつヘーゲルの考えた絶対精神への顧慮を保ちながら、哲学の歴史について考えたが、その後、時間的現象世界の基礎に永遠者を考えるギリシヤ以来の形而上学に対して批判的となり、キリスト教における時間の考え方に同感して、われわれは時間を越えて永遠にいたるのではなくむしろ日常の時間を越えて根源の時間にいたるのであると考え、もっぱら時間の相において形而上学の問題を考え直そうとするにいたったのである。

かくて書かれたハイデッガーの著「有と時」に示されている、「世界」についての分析を、本論文の著者は詳しくあとづけている(第二論文「ハイデッガーに於ける世界の問題」)。道具の連関から出発して最後に達せられる全体であるところの「世界」は、有意味な日常的世界であるが、それは、不安において、死の意識において、有意味性を失い、いわば無に支えられたものであることが示される。世界はこのように明暗の二面をもち、人間の超越論的意志によって支えられているのである。——そしてこのように、人間が自らの可能性の全き否定としての死に直面することによって真の自己となるという根本経験において、世界は時間の未来時相を基礎としてもつが、この未来への投企を前提し、改めて過去の事実性を、「運命」として引きうけることが、真実な歴史を成り立たせるのであり、この本来的な歴史に比しては、いわゆる世界史は二次的な意味での歴史にすぎない(第四論文「ハイデッガーにおける歴史の問題」)。

さて「有と時」における上のような考えは、その後、その予定した伝統的形而上学の批判の課題に面し、かつ近代的主体性とその対極なる科学的世界像とを改めて省みることにより、形而上学の全歴史を「存在の忘却」すなわち「ニヒリズム」をもって特徴づけることへ進む。「存在の忘却」とは、プラト

ソ・アリストテレス以来「存在」を常に「存在者の存在」として、存在者のほうから考えて来ており、存在を存在そのものとしてとらえることをやめている、ということである。ハイデッガーによればこのことは近世にいたっても変わりなくつづいており、科学の成立もニヒリズムの帰結であるという（第三論文「ハイデッガーの根本経験」）。しかし最後にハイデッガーは、存在の真実の直視を中心とする新たな考えにいたっており、これは「有と時」の段階と、存在忘却の歴史を考えた第二段階とを、改めて総合する第三段階の思想を示すものとみとめられる（第一論文「有の間と絶対無」）。

さて上のようにハイデッガーの哲学の歩みの全体を見た著者は、禅の思想（西田幾多郎の用語でいえば「絶対無」の哲学）との比較を試みる（第一論文「有の間と絶対無」）。その要点をいえば、人間が死に直面して真の自己に帰るとハイデッガーが考えるとき、死は乗り越えることのできぬ無であると見、死から退いて自己を発見すると考えているが、禅においては、大死一番絶後再蘇といわれるように、自己は死そのものとなることによって真に生きるとみとめられ、死生の間に隔てがない。著者によればこの点が禅の徹底とハイデッガー哲学の未徹底とを示すのである。ハイデッガーにおいて自己のあり方は「存在可能」であって頽落の可能を存しており、また第二段階のかれの思想においても、自己は根源の近くに住むが根源そのものになりきれないのである。

論文審査の結果の要旨

ハイデッガーの哲学についてはすでに久しく多くの人々によって論ぜられているが、著者の論考はその中で秀逸であって、第一に、このようにハイデッガーの考えの内奥に親しく参入してかれの思想をあつめた研究はまれである。たとえば初期のハイデッガーにおける哲学とキリスト教との接触の機微を明かにしたこと、「有と時」における「世界」論の立ち入った分析、形而上学の歴史を存在忘却の歴史とみる考えの究明など、大いに多とすべき業績である。

著者の研究の第二の特徴は、そのような綿密な理解を前提しつつ、ハイデッガー哲学に対して本格的な対決を敢て試みたことである。ハイデッガー哲学における死の見方と禅の思想におけるそれとの対比を中心においた所論は甚だ徹したものであって、著者にしてはじめてよくしうところである。

ただし所論が明快であるだけに異論もまたありうる。第一の点についてはハイデッガーが「ニヒリズムの歴史」という規定をもって近世の哲学と科学とを正当に扱い得ているか否かをさらに問題にすべきであるとも考えられ、第二の点については禅の悟達が哲学としての論理を持つとする場合死生の一如をいうことにとどまりえぬという反省が禅の思想そのものに生ずるはずであり、このことは、仏教における無の思想の歴史をさらに省みることを促がすであろう。

しかしながらこのような異論の可能性があることはこの主題についてはむしろ当然というべきであって、そのことによって著者の研究のもつすぐれた特色が損われることはない。

よって、本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認める。